

C-63 被服構成に関する研究(第3報)

—農村婦人作業衣の袖の機能性について—
名古屋女大短大 ○古川智恵子 豊田幸子

目的 東海地区における農作業衣は、実態調査の結果、生活様式全般の洋風化に対応して従来の和服形態から和洋折衷、洋服形態へと変化し、最近では既製服化へと急速な移行がみられ、農村婦人の大半が既製作業衣着用の現状を把握した。前報では代表的な既製作業衣4種について人間工学的方面から作業姿勢による皮膚面の变化と作業衣寸法について調査し最も変化の大きい背幅のゆとり量について機能性を検討したが、今回は袖の構成の異なる農村婦人既製作業衣4種の機能性について着用実験を行い比較検討を試みた。

方法 A(マチ入り袖), B(普通袖), C(ラグラン袖)の実験衣の胸囲, 背幅, 丈のゆとりを一定にし, 袖山寸法を5cmと9cmの各2枚ずつ, D(きもの式袖)については身ハッロの有る, 無しとの2枚を作成して, (1)平常時, (2)上肢上挙時, (3)前屈身時の基本動作について順位法及び計測も加味した全体の適合状態を官能検査法により比較検討した。

- 結果 (1)平常時にあいては4種の間には機能的に差がみられない。
(2)上肢上挙時及び前屈身時にあいてはA, B, C間に有意差がみられ, その順位評価には高度に一致性がみられた。
(3)D実験衣にあいては身ハッロ開口部の有るものが機能的に大であるが, 労働衛生的条件としては一考を要する。
(4)袖山寸法の5cm, 9cmの二群の比較にあいては, いずれの姿勢時でも袖山の低い方が機能が大きい。